

論文

長沢鼎の出生と生育について

森 孝晴¹⁾

1) 891-0197 鹿児島市坂之上 8-34-1 鹿児島国際大学



長沢鼎 (1852-1934) 鹿児島国際大学蔵



上之園町にある長沢鼎の生誕地碑 (著者撮影)

1. 長沢鼎¹⁾の出生地をめぐる議論

長沢鼎は1852年(嘉永5年)2月20日に鹿児島城下で生まれている。幼名、すなわち本名は磯長彦輔²⁾で、出生地は上之園町17番地(旧高麗町81番地)である。なぜそこが出生地と言われているかという、まずはそのあたりに長沢の出生地記念碑があるからである。ただし現在の記念碑は二度ほど移動している(現在地は上之園町20-15。地元には「以前は甲南高校前にあった」との声もあるようだ)というから、細かく言うと寸分たがわずそこかどうかは不明である。昭和60年に刊行された荒田小学校^{さんぼうぎり}三方限研究会の『三方限』にも長沢は高麗町の出身と書か

れ、現地の三方限出身名士顕彰碑にも西郷隆盛と並んでその名が刻まれている。

ただ、門田明の『カリフォルニアの士魂——薩摩留生長沢鼎小伝』によれば、従来長沢の出生地に関しては若干の議論があった。とはいえ、当時の武士の出生地というのはもともと正確にはわからないことも多いと聞く。武士たちが自宅で生まれたかどうかははっきりしないし、自宅や居所、宅地がいくつもあることもあったからだ。したがって出生地を厳格に特定することは難しいと思われる。自他共に認める長沢研究の権威である門田の場合も、自らの各著作物によって長沢の出生地についての記述のニュアンス



下荒田町の「長沢鼎本籍・生立ちの地」碑 (著者撮影)

が微妙に変わっている。

最も古い長沢伝である鷲津尺魔の『長沢鼎翁伝』には長沢の生誕地や生育地についての言及はない。長沢の遠縁にあたる犬塚孝明は『薩摩藩英国留学生』の中で、「磯永家は、城南の地高麗町に屋敷を構える小番格の中級武士であったが」とだけ触れている。また、多胡吉郎は著書『海を越え、地に熟し 長沢鼎 ブドウ王になったラスト・サムライ』において「磯永彦輔は、嘉永五年（一八五二）、城下を流れる甲突川の右岸にある荒田の町で、中級武士の家に生まれた」と述べている。

これに対して『評伝 長沢鼎 カリフォルニアに生きた薩摩の士』を書いた渡辺正清はかなり詳しい見方を披露している。まず父孫四郎の名のついた宅地が現在の上之園町にあったとする情報を提供する一方で、明治43年に長沢自身が新戸籍を作るにあたって本籍地を「荒田町53番地」にしたことについて長沢自身が大正12年に「下荒田（旧荒田町）で生まれたから」と記者に語ったことを紹介している。ただし、長沢は長く鹿児島を離れており、鹿児島市内の地名をどれほど正確に覚えていたかについてはやや疑問もある。

そして、渡辺の結論は次のとおりである。

長沢鼎は父周徳の宅地（現・上之園町）で生まれ、幼児期に下荒田の本籍地かその近くに移ったのではと推測できる。

これはかなり首肯できる説だと思われるが、今一度長沢研究の権威者である門田明の説に耳を傾けてみよう。門田も、長沢は三方限の出身だが旧荒田町の生まれではないかと推測している。父孫四郎周徳の本籍地は「荒田町21番戸」だったとの情報などいくつかの根拠を示して、磯長家その

ものは現在の下荒田と関係が深いと結論付けている。長沢は上之園町とも下荒田町とも深い縁があるということになりそうである。

それでは長沢の生まれ育った場所について我々はどう捉えればよいのだろうか。それは筆者の考えではこうである。すでに述べたように実際に生まれた場所は必ずしも居所や自宅とは限らないから、長沢は一定の理由のもとで父の宅地・地所のある上之園町で生まれた。そして、生後出国するまでの約13年間は、三方限などの郷中教育を受けながら上之園や下荒田など磯長家や母の家系の本籍地などが広がる甲突川右岸地域で育った。つまり、上之園から下荒田までの広がりのある地域が長沢鼎の本拠地であり、ルーツであり、アイデンティティーの地なのである。

こういう考え方に立って、長沢が作った新戸籍に基づき、2015年11月には、下荒田町の甲突川のほとりの緑地公園に長沢鼎の「長沢鼎本籍・生立ちの地」碑が建立された。これは現地の八幡校区地区コミュニティ協議会が尽力して建造されたもので、筆者も碑文を作るのに協力させてもらった。このことにより、上之園から下荒田までの地域が長沢カントリーとも言える地域であることが社会に示されたのである。

2. 長沢の教育と生育

犬塚孝明は、磯長家について「……小番格の中級武士であったが、代々暦算家として島津家に仕えて来た」と述べている。門田によると、磯長家で長沢から四代ほどさかのぼると磯長孫四郎周英という人がいて薩摩歴官の一人で高い業績をあげたそうで、彼の弟子が天文館「明時館」館長を務めた。その子である孫四郎周経も歴法家、そして長沢の父孫四郎周徳も同じ道を歩んだらしいが、彼はまた長崎海軍伝習所で航海術なども学んでいる。

ここで注目すべきは何だろう。渡辺正清は歴官を「天文学者」と説明し、暦学者という呼び方もしている。要するに磯長家は代々「学者」「研究者」の家系なのである。このことについてはまた別の機会に、長沢がワイン醸造に生涯をかけることになるころの記述で詳しく述べることになるが、筆者が長沢について強く注目していることのひとつが「科学者長沢」「研究者長沢」ということだ。彼が優れたワインメーカーになったことはこういう家系に生まれ育ったことと無縁ではないのである。

この生育期のもうひとつの重要な視点は「郷中教育」である。長沢は、この薩摩藩独自の教育システムの下で育つ

たわけで、しかも彼が受けた郷中教育は西郷隆盛や大久保利通が受けたものなのだ。これも薩摩武士道との関連で別の機会に詳述するが、郷中教育そのものが薩摩武士道をたたき込む厳しい教育で、長沢が育った方限ではさらに徹底していたと思われる。その教育は文武両道で、小さなころから年上の先輩に鍛えられるという仕組みになっていた。

この郷中教育の中で特に厳しく仕込まれるのが自頭流である。自頭流の特徴は「強さ」と「速さ」であり、「続け打ち」などの練習法から実戦に至るまで徹底して激しく、そしてまっすぐである。引くことは許されず、「一撃必殺」つまり一気呵成に勝負を決めるというもので、あの新撰組さえ恐れた剣法だ。その核心にある思想は「意地」というもので、4つの極めて厳しい教えが知られている。これについてもまた別の機会に詳述するが、とにかくにも薩摩武士道を象徴する剣法であり、長沢はこれを厳しく叩き込まれたようで、実際生涯忘れることはなかったようだ。

では、果たして長沢はこれらを完全に体得して一人前の武士として旅立ったと考えられるだろうか？ 何しろ彼は13歳で渡英しているのだ。だが、当時の元服は12歳から15歳の間で行なわれていたのだし、10代の前半で結婚するというのも珍しくはなかったのだから、13歳だからと言って今の感覚で考えてはいけない。長沢はひと通りは武士としての教育を修了した上で大人として出発したとみてよいだろう。しかも、特に厳しい郷中教育を受けたと考えられるし、さらに鷲津尺魔によれば、7、8歳のころから頭の良さを披露して人を驚かせていたようだし、最終的には開成所洋学校の学生の中から最年少で留学生に選抜されていることも考え合わせると、長沢は、ほぼ完成された薩摩武士となっていたと言ってよさそうである。

こうして見てくると、長沢の鹿児島における少年時代にすでに彼の一生を左右する二つの特徴・本質が表れていることに気づく。それは「学者」「研究者」の血と「薩摩武士道」である。筆者にはこの二つのことが長沢に関わる様々な疑

問にも答えてくれる鍵であると考えられるのである。

注

- 1) 長沢の「沢」については、戸籍から見ても正確には「澤」である。しかし、この字が難しく一般には馴染みが薄いからか、30年以上前の門田明先生の伝記や犬塚先生の書から比較的最近の多胡吉郎氏や渡辺正清氏の書に至るまで「沢」の方を採用している。筆者もそれに倣うことにする。
- 2) 長沢の本名についても、もともとは「磯永」であったが、長沢自身が作った新戸籍の中では両親の名について、「磯長」というように「長」の文字が使用されており、書籍の中で「永」を使用しているのは犬塚孝明氏だけである。よって、長沢の新戸籍にある「長」の字を筆者も採用することにする。

文献

- 荒田小学校三方限研究会（1985）、「三方限」鹿児島：荒田小学校。
- 犬塚孝明（1974, 1981）、「薩摩藩英国留学生」東京：中公文庫，中央公論社。
- 門田明（1991）、「若き薩摩の群像」鹿児島：高城書房。
- 門田明，テリー・ジョーンズ，（1983）「カリフォルニアの士魂——薩摩留学生・長沢鼎小伝」東京：本邦書籍。
- 森孝晴（2014）、「ジャック・ロンドンと鹿児島」鹿児島：高城書房。
- 多胡吉郎（2012）、「海を越え、地に熟し 長沢鼎 ブドウ王になったラスト・サムライ」東京：現代書館。
- 鷲津尺魔（1933）、「長沢鼎翁伝」：鹿児島国際大学蔵
- 渡辺正清（2013）、「評伝 長沢鼎 カリフォルニア・ワインに生きた薩摩の士」鹿児島：南日本開発センター。